

---

# お菓子な男の娘と星降る町

トマト畑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お菓子な男の娘と星降る町

### 【Nコード】

N7447Y

### 【作者名】

トマト畑

### 【あらすじ】

お菓子作りが大好きな男の娘、橘悠華はとある時神を名乗る少女に出会う。

その少女に気に入られた悠華は別世界へと送られる。

天使を名乗るロザリオとニャーと鳴く車をお供にして。

悠華が送られた世界は天使がいて魔族がいて人間がいて魔王がいる世界。

けど悠華はただお菓子を作るだけ好きなお菓子を作るただそれだけであった。

## お菓子な男の娘とオリキャラ紹介（前書き）

初めましてトマト畑です。この小説はティンクル くるせいだーすの二次小説です。こういうのが気に入らない人はすぐにお戻りをお願いします。

とりあえずまずは主人公とオリキャラ紹介です。

## お菓子な男の娘とオリキャラ紹介

橘 悠華 （たちばな ゆうか）

性別 男の娘

妄想CV 堀江由衣

・見た目

髪の毛は水色。

長さは肩にかかる程度。

瞳は緑。

身長 164cm

本作の主人公。最年少の天才パティシエである事以外は普通の男の娘であったが究極神ザ・ゼウスを名乗る少女によってティンクルくるせいだーすの世界に飛ばされてしまう。

（悠華はティンクルくるせいだーすの事を知らない。）

そこで何も知らないまま自由に行動していく。お菓子作りが趣味でゼウスにもらった意思を持つ車『凜々』で洋菓子、主にクレープやケーキなどを移動販売している（軽食等も販売している）。

自らが作ったお菓子に名前を付けて話しかけたりする位にお菓子を愛している。それを見てよく引かれたりもする。

見た目が女の子より女の子な為に性別を間違えられる事も度々あるようだ。悠華がつくる洋菓子にはあのナナカも90点台をつける程の美味しさである。

和菓子も作る事もできるが移動販売には向かない為に殆ど作らないが一部の熱心なお客の為にたまに作っている。これもまた絶品との

事。

困っている人（魔族も天使も含む）を見捨てる事ができずによく助けてしまう。その為にいろんなフラグを建てて、様々な好意を向けられるが鈍感な為にあまり気づいていない様子。

流星くるせいだーすのメンバーとよく似たロザリオを使い闘う事が出来る。

ロザリオはゼウスにより渡された。

そしてそのロザリオにはゼウスの部下であるミカエルの魂が宿っていて悠華に力を貸してくれる。

属性は光。

ロザリオを使つての変身後はスタードライバー 輝きのタクトの主人公であるタクトがアプリポワゼしたときになる銀河美少年の姿。

（ちなみにこれはミカエルの趣味だそうだ。）

使用武器

・エクスカリバーデユナミスト

（見た目は某ライオンの騎士王様のエクスカリバーの色違いの白色柄の部分にミカエルのロザリオを嵌め込む場所がある。）

・ライトシューター （見た目はただの白い装飾銃だが魔力を込める事によって相手を追尾する魔力弾を撃つ事が可能。他人の魔力を込めて撃つ事も可能。）

EXスキル1 バディズシュート（信頼を得た仲間の魔力もしくは霊力をライトシューターに込めて対象に攻撃をする。1〜5回までの攻撃が可能。ただし仲間がいない時は自らの魔力を籠めるしかない。）

EXスキル2 シャイニングバースト（悠華の最大の霊力及び魔力を籠めて放つ必殺技。）

ミカエル

妄想CV 藤原啓治

悠華の頼れる相棒であり究極神のザ・ゼウスの部下。本来の姿は不明である。ゼウスより悠華に渡されたロザリオに宿っている天使。天使とは思えない様な言動で度々悠華を困惑させる。

自称悠華の父親。

何だかんだいいながらも悠華の事を心配しているようである。ゼウスにセクハラをしたためにロザリオに魂を封印されたとの事。

凜々（りんりん）

妄想CV 竹達彩奈

ザ・ゼウスより悠華への送られた意思を持つ車。燃料等は必要はなく悠華が望む限り走り続ける。

見た目は大型の白いキャンピングカーに漢字で凜々と書かれている。中には簡易的なシャワー、ベッド等の設備がある。キッチンもある。ニャーと鳴く。そして悠華になついている。

悠華は凜々で洋菓子の移動販売店『凜々』を経営している。

神位第1位 究極神ザ・ゼウス

妄想CV 新名彩乃

見た目は11eyesのリーゼロッテ・ヴェルクマイスター

悠華をティンクルくるせいだーすの世界に送った張本人で同性愛者。悠華のお菓子に対する愛情を気にいった為に様々な能力を与えた。

見た目と言動から分かりづらいが実は純粋な少女で破廉恥な話等が苦手である。下手をすると吐血する場合もある。

その力には誰もかなわない程強大だそうだ（ミカエル談）。

彼女も悠華の事を心配して度々ミカエルが宿っているロザリオを通して連絡を取っている。

## お菓子な男の娘とオリキャラ紹介（後書き）

とりあえずこんな感じです。一応追加変更予定もあります。何か意見があつたらよろしくお願いします。



## お菓子な男の娘とプロローグ（前書き）

それにしてもなぜティンクル　くるせいだーすの二次小説がないの  
だろうか？自分が見つけきれないだけなのだろうか？  
とりあえずのプロローグ。駄文ですのでご勘弁を。

## お菓子な男の娘とプロローグ

悠華 side

お菓子は良い。何が良かった？ そんなのは簡単な話、人を笑顔にする事が出来るから。

ボクはそんなお菓子を作るのが大好きだ。

小さい頃から父親や母親の影響でよくお菓子を作っていた。父親は洋菓子職人、母親は和菓子職人であった。その為にありとあらゆる事を教えられた。最初の内はよく分からないままに作っていた。

だけど出来たお菓子を食べて喜んでくれた人達の顔を見る事がボクは嬉しかった。だからボクはお菓子を作り続けた。その内いろんな賞を取っていたり、最年少の天才パティシエ等と言われたりもした。けどそんな事は関係ない作りたいからボクは作る。ただそれだけである。

そんなある日ボクはとあるお菓子の注文を受けた。注文者は不明でただ届ける場所、時間と新作のケーキを10個とだけ書かれていた。父親や母親はきっとイタズラだろうと言っていたがボクはイタズラであろうと难道であろうと関係なくケーキを作った。ケーキを作れば注文した人が笑顔になるならばと考えた。

そしてボクは父親と母親には内緒でケーキを作り指定された場所に持って行った。

指定された場所は少し古びた公園で時刻は夜の7時。

「やっぱりイタズラだったのかな？」

辺りを見渡してみても誰も見あたらない。あるのは無人の遊具のみ。

「あまり遅くなるとお父さんに怒られそうだけどこのケーキを食べ

たいと思っている人もいるだろし。よしやっぱり少し待ってみよう。」

ボクはもう少し待ってみる事にした。少し恐い感じもしたけどボクのケーキを食べて喜んでくれる人がいるならと思ひボクは近くにあったブランコに座った。

……一時間経過

「もう少しだけ待ってみよう。」

……二時間経過

「きつと来てくれる筈。」

……三時間経過

「やっぱりイタズラだったのかなあ？」

現在の時刻午後22時。さすがにイタズラではないかとボクも思い初めていた。もう辺りは真っ暗であった。それと先ほどより携帯電話に父からの電話が何件も入ってきていた。全て無視していたけれど。

「これ以上は流石に不味いよね。下手したらお父さんに、いや確実に怒られるよね。はあごめんねみんな、ちゃんと美味しく食べてあげるからね。」

ボクは膝に抱き抱える様にして持っていたケーキ達に謝罪をしてい

た。ボクはよく自らが作ったお菓子達に話しかけたりする。よく他の人達には可笑しいって笑われたりする。お父さんにはやめなさいって言われたりもするんだけどケーキは自分の子供だなんて考えていたりもするわけでありまして。やっぱり美味しく食べてもらいたくて。

「帰ろうつと。」

ボクは帰ろうと思えばランコより立ち上がり家への帰路へとつこうとしていた。そんな時であつた。

「貴方のお菓子に対する愛情気に入ったわ。」

「お、お化……………女の子？」

一人の女の子が黒いドレスを着たまるでお人形さんのような少女がボクの前に立っていた。  
もしかしてこの娘が……………。

「私は「この子達を食べてくれる人ですか！？」え、ええそうなるわね。」

「よかつたねみんなー！！」

あまりの嬉しさにケーキ達が入っている箱を抱きしめる。無論潰れない様に優しくふんわりと。

「ふふふつ、本当に可愛い子ね。これで女の子だったらどれほど良かった事かしら。」

何やら少女が呟いていたがボクは気にする事はなくケーキ達が入っ

ている箱を少女に突きだす。

「美味しく食べてくださいね。」

「男の娘でもかまわないわ。もうこの子食べちゃおうかしら？」

少女は何かを必死に考えるかの様に額に皺を寄せながらも箱を受け取ってくれる。

「一応生クリームを使っているケーキもあるからドライアイスを入れてありますので気をつけてくださいね。」

三時間も経ったからもうドライアイスが二酸化炭素に戻っているかもしれないけどね。

「あの娘が言うだけあって人間の食べ物の割には美味しそうね。この緑色のやつが乗っかっているのは何かしら？」

少女は箱を開けてまるで珍獣見るかの如く箱の中に入っているケーキを見つめていた。

「それはメロンケーキのメロンちゃん。生地と生クリームにメロンをたっぷり入れてあるんだ。」

「メロンねえ。まあいいわ頂くわ。」

ケーキを取り出して豪快に正面からかぶり付く少女。さよならメロンちゃん。

それにしても今時珍しい娘だなあ。フォークもスプーンも使わないでかぶり付くなんて。

「美味しい、何よこれ美味しいじゃない！これは何よ？この赤いのが乗ってるのは！？」

メロンケーキをあつという間に食べてしまった少女は直ぐに別のケーキを取り出す。

「それはミックスベリーケーキのミーちゃん。苺にラズベリー、ブルーベリーをふんだんに乗付けてみました。」

「甘いけど酸っぱい。甘酸っぱいのね！！恋の味のケーキね！！」

やはり豪快にかぶり付く少女。さよならミーちゃん。

それから合計五つものケーキを頬張った少女。

「そんなに食べて大丈夫？晩御飯は流石にこの時間だから食べ終えたとは思っけど。」

「問題ないわ。私には人間の様に空腹や満腹なんてないのだから。」

「よく分からないけど……………あっ！？」

「ん？何よ？」

ボクは少女の頬についたクリームを発見する。

「動かないでね。……………はいとれたよ。ペロツ。」

少女の頬についたクリームを指で掬いボクはそのまま口に運び舐める。結構クリームも滑らかに出来ているんじゃないかな？

そう思ったボクは少女に感想を聞こうとする。だけど少女の様子が可笑しい事に気づく。

顔を赤くして下を向きプルプルと震えていた。

「ど、どうかした？」

「ほ……………」

「ほ？」

最初にほが付く言葉って何があったっけ？

「惚れてまっやろうがー！！」

「え？何何なの！？」

少女は突然叫び声をあげる。いや大声をあげるの間違いだろうか？

「貴方何なの！？私の萌えキュンポイントをそんなに連打して！？私を萌え殺す気なのかしら！？」

「え、ええと？」

な、何か気に触る事をしたのだろうか？

「決めたわ、貴方この私の究極神ザ・ゼウスの権限によって別世界に送るわ！！！」

もしかしてこの娘は……………。

「病院まで送って行くのか？ほら病院の人達も心配している筈だよ？」

「私は精神異常者ではないわ！」

みんなそういうんだよね。

「大丈夫ボクも一緒に謝るからね？」

「おのれー！！ならこれでどうかしら！？」

少女は顔を真っ赤にして指をパチンと鳴らす。そしてその瞬間であった。世界が真っ赤に染まった。ボクの周りにあった物が全て消え去り残ったのはボクと目の前の少女だけだった。

「どうかしらこれで信じてくれるわね？」

「まさか……………！？」

「そうそのまさ」「これは夢？」どうやっても私の事を信じないつもりみたいね！？」

ボクは辺りを見渡して見るけれど何も無い。

あるのは真っ赤に染まった空間だけ。

試しに自らの頬をつねってみるけど。

「いひゃい。ならこれは夢じゃないのかな？」

「だから先ほどからそう言っているでしょう！？橘悠華。」

「どうしてボクの名前を？」



教えてなかった筈だけど？

「驚く事はないわ私は究極神ザ・ゼウス。知らない事は何もないわ。橘悠華。最年少で数多くの賞を受賞し、最年少の天才パティシエと呼ばれている。このあいだ和菓子コンクールで優勝してなかったかしら？まあその和菓子は貴方が作って貴女の母親の名前で出したのよね？」

事実である。母親に何でもいいからと新作の和菓子を作ってくれと言われて作ったのだけれど気づいたらそれがコンクールに出されていた。別に気にはしなかったけどね。

でもそれを知っているのは父親と母親だけだった筈なんだけど。もしかしてこの娘は本当に？

「信じてくれたところで今から貴方を別世界に送るわ。送る世界は貴方がお菓子を楽しくそして自由に誰にも気にする事はなく作れる世界が良いわね。」

「あの、別世界って一体？それに送るとか何とかって？」

「悪いけど今話しかけないで。どの世界がいいかしら？あの娘に聞くのは癪にさわるのよね。……よし決めた！！」

しばらく頭を捻りまくっていた自称神様は納得がいったのか元気良く声をあげる。何が決まったのだろうか？

「貴方を送る世界はティンクルくるせいだいすの世界よ！！」

「くるくるぱー？」

「違うわティンクルくるせいだいすよ！！貴方知らないの！？結構

有名なゲームよ!!」

「ごめんなさいゲームは親にさせてもらえなかったから。」

興味はあつたんだけどそんな事をする時間があるならお菓子を作ринаさいとお父さんとお母さんに言われてたから。まあボクもお菓子作りとゲームを比べると断然お菓子作りの方に軍配は上がったんだけどね。

「そう、知識がないのね。でもそれもまた一興ね。今から貴方を別世界のティンクルくるせいだーすの世界に送るわ。まあどういう世界かは説明しないでおくわ。でも敢えて言うなら貴方が誰にも何も言われる事もなくお菓子を作れる世界と言っておこうかしら。」

「…………誰にも何も言われないでお菓子が作れる世界。もし本当にそんな世界があるのなら。それならボクは…………。」

お父さんやお母さんに言われたお菓子を作らなくてもいいんだ。無理矢理コンクールやテレビに出される事もなく、好きでもない事をしなくてもいいんだ。ボクはその別世界に既に魅了されていた。

「ふふふ、交渉成立ね。ならまずは能力の付与かしら? 変なのに絡まれたらめんどくさいしね。そうね身体能力はあの世界なら七大魔将のバイラスより少し上くらいがちょうどいいわね。」

バイラスってなんだろう? 人の名前だろうか?

「魔力は二べの魔女より少し上。普段は隠蔽状態は当たり前ね。」

なんだか勝手に話が進んで行くんだけど大丈夫かなあ？

「うーん、くるせいだーすなら変身がお約束よね。………そういえばこの間私にセクハラしようとしたミカエルの魂をロザリオに封印したっけ。」

ゼウスさんは指を再びパチンと鳴らす。するとゼウスさんの手の中には銀色のロザリオが現れる。中央に金色の宝石が嵌めてある。綺麗だなあ。

『ああなんでえゼウスか。何のようだ？俺が恋しくなっちまったか？ヒヤハハハハハハハ。』

突然どこからか声が聞こえる。結構歳を取っている感じの男の人の声だ。だけど辺りにはボクと嫌そうな顔をしながらロザリオを見つめるゼウスさんしかいない。

「そんなわけないでしょうが。貴方に頼みがあるのよそこで事態が理解出来ずにボケツと突っ立っている可愛らしい子に力を貸してあげてほしいのよ。」

『ほう、なかなかの上玉じゃないか。後10年もすればいい女になるぜえありや。』

ゼウスさんが右手に持っていたロザリオをボクの方に向ける。気のせいかロザリオの中央に嵌めてある金色の宝石が光る。さらには風も吹いていないのに勝手にゆらゆらと動いた様な？

「残念だけどこの子は男の娘よ。」

『ああそついうことかい。道理でてめえが食つてねえわけだ！』

「砕くわよミカエル。」

『わりいわりい。てめえみたいな純情小娘がそんな事できるわけなかったな。しようとしても興奮して血を吐いて終わりだな。ヒヤハハハハ。』

「人の神経を逆撫でする天才ね貴方は。まあいいわ私は寛大なる究極神ザ・ゼウスそんな事では怒らないわ。……悠華受け取りなさい。」

もしかしてロザリオが喋っているのだろうか？

そんな事を考えているとゼウスさんはロザリオを唐突にボクに投げ渡す。

「うわつと。」

『ナイスキャッチだ坊主。』

「やっぱりロザリオが喋っている。」

『あんまり驚かねえんだな。』

「だって神様と出会った後だから。」

『ちげえねえな。それで坊主の名前は？』

「悠華、橘悠華。よろしくね。」

『悠華かいいい名前じゃねえか。俺の名前はミカエル。大天使ミカエルだ。気軽にパパ、もしくはダディと呼んでくれや。』

「ええと？」

ボクはミカエルの言動に戸惑いつつゼウスを見る。

「無視して構わないわ。そいつはただのセクハラ爺よ。」

『何でえ、尻のひとつや二つ触ったくらいで。こんなのに人の魂を封印しやがって。』

「ミカエルそんな事したんだ。」

『何言ってやがる悠華。男なら一に色事、二に色事、三四も色事、五も色事だろうが！？』

「そうなの？」

「その馬鹿の言う事は半分は聞き流しなさい。とりあえずそんなのでも大天使の力を持っているから何かの役には立つと思うわ。くるせいだーすの世界に送った後はそいつに色々聞くといいわ。それと最後に凛々来なさい。」

ゼウスさんは手をパンパンと二度くらい叩く。すると車のエンジン音らしきものがこちらに近づいてくる。

『随分と気前が良いじゃねえか凛々をつけるなんてよ。』

「それほど悠華を気に入っただけの事よ。」

「ねえ凜々って何？……って何か来たー！？」

謎のエンジン音と凜々という名前に疑問を持ちボクは質問しようとする。けれどこちらに向かつてもの凄い勢いでこちらに向かつてくる車に気を取られてしまう。

『悠華何も聞かずに五歩後ろに下がれ。』

「あ、うん。」

ボクは言われた通りに後ろに下がる。

《ニヤー！！》

「あの子は凜々。意思を持つ車でぶおらっー！？」

あ、ゼウスさん凜々に轢かれた。

『最高だなあ凜々！！！！』

《ニヤー。》

「結構吹き飛ばされたけど大丈夫かなゼウスさん？」

『あれでも一応神だ大丈夫だろ。それより早く凜々に乗り込みな悠華。』

「神様凄いね！！」

あんな勢いの車にぶつかられて大丈夫だなんてさすが神様。　　そん

な事を思いつつ白いキャンピングカーの凛々に乗り込む。

「凄く広い。」

中に入ってみるとボクはその広さに驚きました。最初に目についたのは簡易的なキッチン。オーブン等も完備されている。これならケークやクッキーなんかも作れる。

『広いだけじゃねえぞ。何と100万馬力だ!!』

「よく分からないんだけど。」

『要はすげえ車なんだよ。』

何となく分かってしまう自分がいました。気を取り直して……。

「それでどうやって別世界に行くの？」

『それなら簡単だ。凛々エンジン全開だ!!』

《ニヤー!!》

その瞬間身体に圧倒的なGがかかる。立っているのが辛いくらいの。ボクは車の中に座り込む。

「うううう、気持ち悪くなりそう。」

『このまま一気に飛ばして別世界にいくぜ!!』

どこのバツ トウザフーチャー？

「悠華！ミカエルの魂が宿っているロザリオを通せば私と話せるから何かあったら連絡しなさい！！困ったらゼウスお姉ちゃんに連絡よー！！」

轢かれた筈のゼウスさんが凄い勢いで走っている筈の凛々と並走して走ってくる。ゼウスさん足早いなあ。

何とか壁に掴まりながらも立ち上がりゼウスさんに手を振る。

「それとケーキ美味しかったわよ。ありがとっつてぶへらっ！？」

あ、転けた。

『アヒヤヒヤヒヤヒヤ！！まさかあの百合百合究極神ゼウスが人しかも男に礼を言うなんてな。お前何をしゃがったんだ？』

「ただケーキをあげただけだよ。」

『ケーキねえそれはうまいのか？』

「うん。とっても美味しいよ。ケーキの他にもいろんなお菓子があってね。最近は飴細工を利用したお菓子を作ったりしているんだけどね……………」

ボクは新しい世界で何が起こるのかどんなお菓子を作るのか楽しみでしかたなかった。

（もうお父さんやお母さんに無理矢理お菓子を作らされる事もなく自分で好きな様に好きなお菓子を作れるんだよね。



ボクのお菓子 新しい世界で誰かを笑顔にできるといいな。)

ザ・ゼウス side

「行ったわね。あの子のお菓子なら魔族も天使も人間も魔王だって笑顔にできるわ。だってこの私究極神ザ・ゼウスを笑顔にしたのだから。」

今まで私はこれほど心の底からプラスの感情を感じた事はないかもしれないわね。

「帰って他の神に自慢でもしようかしら?.....そういえばあの子からもらったケーキは何処に行ったのかしら?」

そういえば見あたらないのよね。最後にあつたのは凛々に轢かれる.....ところ...までは。

「ま、まさか!??」

私は辺りを見渡して見る。するとケーキは意外と簡単に見つかった。箱に入った状態で素晴らしい位に潰れていたのだけれど。そして私はそれを力なく拾う。中を開けて見るけれど中身は箱と同様に潰れていた。

「さ、最悪じゃない。こうなれば月に一回、うつん週に一回位はケーキを届けさせようかしら？」

意外とあの子とは長い付き合いになりそうね。

私は潰れたケーキをじっと見つめながらその様な事を考えていたわ。

## お菓子な男の娘とプロローグ（後書き）

現在の悠華のアシストキャラ

神位第1位 究極神ザ・ゼウス

ミカエル（ロザリオ）

凛々（車）

ここで補足説明。ゼウスやミカエルはクルくるの世界の天使等とは関係はないです。ゼウス達は全世界の神、天使。

クルくるの天使達はあくまでクルくるの中でのみの天使という事でお願ひします。正直自分も何言っているんでしょうかとも思います。何かご質問等があったらご気軽に聞いてくださいね。

## お菓子な男の娘と初めての友達（前書き）

とりあえずまだ原作キャラは出ないです。出すのは次回からの予定です。

今回はまあ題名通りです。

## お菓子な男の娘と初めての友達

悠華 side

あれから凜々に乗って走り続けていたんだけどどうやら気を失っていたようで気がついたら辺りは夜で現在地はどうやら高台の丘のようだ。その証拠に見たことのない街並みが見下ろせた。どうやら本当に別世界に来たようである。

「それにしても星が綺麗だなあ。」

ボクは凜々の窓を空けて身体を乗り出して空を見上げる。

「あ、流れ星だ！お願いしなくちゃ、ってもう流れちゃったよ。」

残念。もう一回流れないかな？

ボクは期待をしながら星空をじっと見つめる。

《ニャー。》

突然凜々が鳴き声をあげる。

「どうしたの凜々？」

『反対側の窓から空をってみろだよ。』

いつの間にか首にかかっていたミカエル（ロザリオ）がゆらゆらと揺れながら凜々の言葉を翻訳してくれる。

「ミカエルいつの間にそんなところに？」

『お前が寝てる間にな。まあ細かい事は気にするな。それより早く反対側の窓を開けてみな。』

「うん、わかった。」

言われた通りにボクは反対側の窓に近寄って窓を開ける。因みに引き戸。

そして外の光景に目を奪われた。

「凄い流れ星がいっぱい。これって流星群？」

窓の外の夜空にはたくさんの流れ星が流れていた。本当に綺麗。

星を題材にしたケーキを作るのもいいかもしれない。金平糖を使ってみるかな？星形のクッキーは少し地味だろうか？マイナー感が漂う気もする。星形にくり貫いたゼリーにアイスを……。

などとボクが星を題材にしたお菓子を考えている時だった。

『ゼウスの野郎よりもよってリ・クリエの時にこの世界に送りやがるとは面倒な事をしてくれるじゃないの。』

何やら不機嫌そうに口ザリオ中央の宝石を点滅させて呟くミカエル（どうやらミカエルが喋る時は口ザリオの中央に付いている宝石が点滅するようである。）

《ニャー。》

凜々も同意するかのように鳴き声をあげる。

「ねえミカエル、リ・クリエって何？」

『なんだゼウスの奴そんな重要な事も言っていないのか。まあいいリ・クリエって言うのはなあこの世界の中心である今俺達がいる町、流星町に流星が多くふる時期のことを言つてな。期間は約半年から数年間程だった筈だ。リ・クリエは世界に何らかの災いをもたらすとされている、魔族が人間界に来ること以外、詳しい事はよくわかっていねえ。まあゼウス辺りの神ならなんか知ってるんだろうがな。これは事実どうかは知らねえが初めてリ・クリエが起きた時はこの世界を破壊するほどの威力だったそうぞ。』

「よくわからないんだけど。」

『簡単に言えばリ・クリエはめんどくさい、関わると録な事がない。とも思つていればいいんだよ。それにお前はお菓子を作る為此こに来たんだろ。闘いにきたわけじゃねえだろ?』

「それもそうだね。ああ早くお菓子が作りたいな。でもその前にキッチン設備も把握しなくちゃいけないし、凜々の中もいろいろ見てみたいしなあ。」

《にゃあ。》

「どうかしたの凜々?」

『優しくしてね、だよ。』

「……………ん?」

《ニャー。》

『ほー。なんだ悠華に惚れたのか？』

「な、なんの話し？」

『いやなに凛々は悠華になら全部見せてもいいんだとよ。あんなところやこんなところまで。』

「状況が見えないんだけど。」

『簡単な話し凛々は悠華に一目惚れしたそうだ。ちなみに凛々はメスだ。』

《ニヤー！！》

『ああ、はいはい。メスじゃなくて女の子だそうだ。』

「とりあえずお友達からよろしくね凛々。まずはお互いを知る事から始めよう。」

『おいおい。別に車相手にそこまで丁寧になんなくてもいいんじゃないかね？』

「凛々だって心をもった女の子なんだから凛々個人として扱わないと駄目だよミカエル。」

《ニヤー。》

『惚れ直した、悠華の為なら何でもしてくれるそうだ。』



「ありがとうね凜々。」

『たくつ、ほらいつまでも窓を開けてないでさっさと閉める寒くてしかたねえ。』

「うん、りょうかい。……………あれ？」

ロザリオなのに寒さを感じるのだろうか？

そんな事を思いつつゼウスに言われて窓を閉めようとしたその時だった。夜空に可笑しな光景を目にする。

『なんだどうした？なんかあんのか？』

《ニヤ？》

「いや、流れ星が。」

『ああ？流れ星ならたくさん降ってるだろうが。』

《ニヤ。》

「そうなんだけど……………何か物凄い勢いで近づいてくるんだよね、流れ星が。」

『なに！？』

《ニヤ？》

二人が驚くのも分かるんだけどボクが一番驚いているんだよね。白い流れ星がこちらに向けて流れていや、もう突っ込んできてないかな？

「ブギボー！？」

「ん？ミカエル何か言った？」

『いや何も言っていないが。』

《ニヤー。》

『凜々も何も言っていないだよ。気のせいじゃねえのか？』

「今何か確実に聞こえたんだけど。……………ってうわ！？」

何かの叫び声らしきものに気を取られたボクは眼前まで近付いていた流れ星に気付く事が出来ずに頭に流れ星が衝突する。

「ってあんまり痛くない。」

「ブギ。」

「ぶぎ？ってなんか頭の上にいるんだけど！」

頭の上の重みを感じてそれに手をのばす。

「おお、なんか柔らかくて真ん丸だ。」

「ブキウギ。」

「そして頭の上になんかいてブキウギ言ってるんだけどミカエルボクの頭の上何がいるのかな？まさかお星さまなわけないよね？」

ボクはミカエルのロザリオを外して頭の上の光景を見せる。

『こいつはやべえ、悠華すまねえな俺が不甲斐ないばかりにこんな目にあわせちゃって。俺って奴はいつもこう遅いんだよ！』

《ニヤ、ニヤー！！！》

「え？何なのボクの頭の上のどうなってるの！？」

『悠華お前の事は忘れねえ。』

「そんなに危険な状態なのボクの頭の上！？」

《ニヤ、ニヤー！！！！》

頭の上を見たミカエルの反応と凜々の鳴き声にボクは不安を隠せず  
に頭の上に乗っかっていた真ん丸さんをゆっくりと掴み目の前まで  
降ろす。

「ブキ？」

「……………可愛い。」

ボクの頭の上に乗っかっていたのはサッカーボールより一回り小さい  
位の大きさの黒くて丸い生き物だった。

『アッヒヤヒヤヒヤヒヤ！最高だぜ悠華今のお前の顔ってあだ  
！？』

とりあえずミカエルはそこらへんに投げた。

「ところで君は？」

「ブキウギー。」

「ブキウギっていう名前なの？」

「ブキツウギッ。」

「仕方ないからミカエル訳して。」

『何も投げるこたあねえだろうが。少しからかったただけだろうが。』

ミカエルがロザリオに魂を封印された理由がわかった気がする。ミカエルを拾おうとした時『くー。』と可愛らしいお腹の音が聞こえる。どうやらブギウギからみたいである。

「ブギー。」

「ん？お腹が空いたの？」

「ブギー。」

こくりと身体を傾かせるブギウギ。

「何か食べれる物作るから少し待っててね。」

「ブギ。」

「ってそこに行くんだ。」

再びボクの頭の上に乗っかるブギウギ。どうやらボクの頭が気に入ったみたいだ。

『んなことより早く俺を拾えよ！』

「そこでしばらく反省しなさい。」

『まじかよ。』

《ニヤニヤ。》

『ざまあみるだど！？凜々てめえ言わせておけば。……それにしても床つめてえ。』

とりあえずミカエルは無視して何かないかなあ？ボクはキッチンの戸棚等を調べてみる。

「小麦粉に塩に砂糖。いろいろあるけど手早く作るならこれかなホットケーキミックス。」

ボクが取り出したるはみんなの友達ホットケーキミックス。その名の通りにホットケーキを作るのにも作れるんだけど他にも色んなお菓子も作れるんだよね。

「今回はホットケーキを作ろうかな。エプロンは……あつたあつた。」

本当に凜々の中には何でもあるんだね。ちなみにエプロンは青色のエプロンに漢字で凜々ってかいてあつた。それでは始めよう。まずは卵をボールの中に割っていれまして牛乳と混ぜるそしてそこにホットケーキミックスを加えて手早く混ぜる。

その間にフライパンを中火で温めて、生地が準備できたらそれを高い位置から流し入れると。そのまま弱火で焼いて、表面が少し乾いてポツポツと穴が空いたら裏返してつと。

「ここがボクは好きなんだよね。よつと！」

フライ返しでホットケーキをひっくり返す。これが綺麗にできると嬉しいんだよね。

『ほー、うまいもんだな。』

《ニヤ。》

「ブギウギ。」

「ホットケーキはよく朝ごはんに食べていたからね。初めて作ったのもホットケーキだったんだ。」

なんだか懐かしいな。

きつね色になるまで焼いたら出来上がり。

「後はハチミツをかけてバターをのつけたら出来上がり。10枚位焼けばいいかな？」

作っていたら自分も食べなくなるのはしかたないよね。

「ブギブギ!!」

『美味そう。早く食べさせろだよ。』

頭の上でピョンピョン跳ねるブギウギ。気にいってくれるといいんだけどね。

どうやら食器やナイフやフォークも完備されているようである。これもゼウスさんが準備してくれたのであろうか？

大皿に乗せたホットケーキをキッチンに備え付けられていた白いテーブルに置く。

「ブギボー!!」

「慌てないでねブギウギ今飲み物を出すから。何かないかなあ。」

多分慌てて食べて喉に詰まらせたら大変だからね。

「飲み物もいろいろあるんだね。とりあえずこの何故か敷き詰めるかの様に入っている牛乳にしようつと。」

ミルク・牛乳。聞いた事も見たこともない牛乳だけど試しに飲んでみようかな。

『悠華頭の上の奴が早くしないと腹が減って死にそうだよ。』

「……………ブギー。」

「ごめんごめん。じゃあ食べようか?」

少しぐったりとしたブギウギを頭の上からおろしながらボクは椅子に腰かけて膝の上にブギウギを乗つけてあげる。

「今切り分けるからね。はいどうぞブギウギ。」

切り分けたホットケーキをフォークで刺してブギウギの口元へと持っていく。

「……………ブギ。」

それを力なくブギウギは口の中で咀嚼する。

「どうかな?もしかして美味しくなかったかな?ホットケーキは結

構自信があつただけだ。」

「……………ブギボー!!」

ほっちゃんを飲みこんだブギウギは突然膝の上で跳び跳ねる。(ちなみにほっちゃんとはこのホットケーキの名前。)

「ブギウギ!?!どうかしたの?」

『良かったじゃねえかこんな美味しいもの食べた事ねえってよ。』

「ブギ!ウギ!!」

「良かった。気に入ってもらえて。はいどうぞ。」

口を開けて次を催促するブギウギにボクは再度切り分けて口に運ぶ。それを繰り返して10分位経ったのかな?

「ブギボー。」

『もう食べられないそうだ。』

「まあ十枚全部食べればそうなるよね。そんなに美味しかったならボクもほっちゃんも嬉しいよ。それにしてもこの牛乳美味しい。これで何か作ってみようかな。」

牛乳を使ったお菓子ならやっぱりケーキだね。これだけ濃厚な牛乳ならいいのが作れそうだよ。

『ホットケーキが俺も封印されてなければ食べてみたかったもんだ。』



《ニヤー。》

『凜々は食べねえだろうが。』

「あはは。それでブギウギはどうしようか？」

「ブギギ。」

ホットケーキを食べてお腹というか身体を膨らませたブギウギは再びボクの頭の上に乗っかる。

「そんなにボクの頭の上が気に入ったのかな？」

『どうやらお前と一緒にいたいんだとよ。』

「そうなの？」

「ブギウギ。」

『悠華の事が好きになったんだとよ。』

《ギニヤ！？》

「もしかして今のボクはモテ期なのだろうか？」

「ブギウギ。」

頭の上でころころと転がるブギウギに手を伸ばしながら自分が今まで誰かに好かれた事がなかった事を思い出す。

「まさに灰色の青春だねえ。」

「まあいいじゃねえか。今は好きになってくれた奴が二人もいるんだからよ。しかし魔族に好かれるとはこりゃあ厄介な事に巻き込まれそうだなあ悠華は。」

「ねえミカエルさっきのリ・クリエの説明の時からきになってたんだけど魔族って何？」

「まずはそこから説明しなくちゃならねえのか。いいかよく聞けよ。魔族っていうのは基本的に自分の欲望に忠実に行動する奴らでな。本来ならここではない魔界という世界でくらしているんだが。中には人間界にくる奴らもいるわけだ今お前の頭の上にいる奴らみたいにな。」

「ブギボー。」

「ほうほう。」

わかった様なわからない様な。

《ニャー。》

「ホントに分かってんのか？ああそれと大丈夫だとは思うが七大魔将っていう言葉を聞いたら逃げろ。そして絶対にかかわるなよ。」

「ん？七大魔将って何？」

「魔族の中でも強い力を持つ奴らだ。いいか絶対魔将には関わるな

よ！』

「そこまで言うなら。わかったけど魔将の人達はお菓子食べないかな？」

『言ったそばからこれかよ。』

《ニャー。》

「ブギウギ。」

「わかったわかった。とりあえず後片付けしたら今日はもう寝るかな。」

携帯を開いてみると22時30分であった。

「ブギウギ。」

『そいつも手伝うだよ。』

「本当？ありがとうブギウギ。なら洗った食器を拭いてもらっていいかな？」

「ブギ。」

使った食器を水に浸けながらボクはこれからの事に想いをさせる。

「明日は下の町に行ってみようかな。それでいろいろと見て回ろうかな。」

新しい友達もできたし明日は何かいい事がありそうだな。  
いやきつとあるはずだ。

『明日の事を考えるのはいいんだがよ。いい加減に拾ってくれねえ  
か？』

あ、忘れてた。

## お菓子な男の娘と初めての友達（後書き）

現在の悠華のアシストキャラ

神位第1位 究極神ザ・ゼウス

・お姉ちゃんに加護

味方のEXゲージを最大にする。

ミカエル（ロザリオ）

・リTHEレクション

味方のHPを回復する。

凛々（車）

・突撃自動車

（敵に最大速度で突撃する。）

ブギウギ（魔族）

・体当たり

（敵におもいつきり体当たりをする。）

アシストはこんな感じでしょうか？

まあこちらでも修正する予定です。  
何か意見やおかしなところがあったら遠慮なくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7447y/>

---

お菓子な男の娘と星降る町

2011年11月23日15時49分発行